



Title	教養概念の成立と「モダン」意識
Author(s)	木村, 裕之
Citation	大阪大学, 2007, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/47178
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 ＜a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed >大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏 名 き 木 む ら ひ ろ ゆ き
之

博士の専攻分野の名称 博 士 (人間科学)

学 位 記 番 号 第 2 0 8 1 3 号

学 位 授 与 年 月 日 平成 19 年 3 月 23 日

学 位 授 与 の 要 件 学位規則第 4 条第 1 項該当

人間科学研究科人間学専攻

学 位 論 文 名 教養概念の成立と「モダン」意識

論 文 審 査 委 員 (主査)

教 授 木 前 利 秋

(副査)

教 授 Wolfgang Schwentker 教 授 中 山 康 雄

論 文 内 容 の 要 旨

「人文主義的な教養 (Bildung) 理想はドイツではヴィルヘルム・フォン・フンボルトによって構想され、各大学において実現された」(レーヴィット)といわれる。このように教養概念の考察は一般にはフンボルトから始められる。しかし、本論考は、教養概念が形成されるさいにその概念にとって重要な構成要素がどのようなコンステレーションにあったかを考察する。戦後ドイツで展開された概念史と 1980 年代以降とくに盛んになってきた受容史の成果を取り入れて教養概念を考察する。

簡単に教養概念を説明するならば、その概念の核は内面から自発的に自己を形成することである。この論文では、その教養の概念に含まれた「形成・発達すること」が当時の時間・時代意識とどのように関わっていたか、また内面性がどのように成立したかを、教養の要素となる他の概念とのコンステレーションをとおして描き出す。そして、それが典型的な二つの教養のあり方(教養小説と美的教養)にどのように表れたかを考察する。

モダン概念は本来「新しい」という意味であり、5 世紀頃から使われていた。しかし、新しいことに対する価値付けは時代とともに変化する。芸術では新旧論争が起こる 17 世紀まで古代芸術が時代を超えた普遍的な価値を持っていて、模範とすべきであると考えられていた。新しいものに価値があると考えられるようになったのは人類が「進歩」し、「完成」に向かっているという信念を持ったときである。それは同時に「未来」そのものに対する考えをも変える。つまり、人はみずから理想を描き、そこへ向かうように現実を調整するようになる。その時間意識は教養概念が成立するときの根底にあった。

教養概念の核となる内面性は、センチメンタリティ概念に強く影響を受けた。ドイツではその概念を受容することで内面性が培われた。センチメンタリティ概念は、人間に自然に備わる感情であり、それを基礎にして道徳哲学が唱えられた。それは封建社会を覆す力となった。ドイツではセンチメンタリティ概念を、はじめは直接的にイギリスから受け入れ、次いで、フランスを経由したものを受け入れた。第一期はリチャードソンやスターンの小説とスコットランド啓蒙の思想をドイツの啓蒙主義者が受け入れた。当時ドイツでは英語に習熟した人間は少なかったため、翻訳が思想や概念の受容に大きな役割を果たした。しかし、概念の受容過程でその言葉を翻訳すること以上のことが起きている。スターンの小説の翻訳はドイツの読者に理解しやすい翻訳であったが、スターンのアイロニカルな面が抜け落ち、内面性を強調することになってしまった。また、スコットランド啓蒙主義者ファergusンの道徳哲学が受容される際には、政治的な参加の要素が抜け落ちてしまった。第二期の受容は、なんといってもルソーの影響が大きか

った。とくに『新エロイーズ』はドイツの疾風怒濤期と重なった。ゲーテの『若きウェルテルの悩み』は、ルソーが『社会契約論』と『エミール』の両方に向かったのとは違い、人間の内面性へと帰っていった。

教養概念は二つの形で体现された。ひとつは教養小説として、ひとつは美的教養として。教養小説の代名詞ともなっているゲーテの『ヴィルヘルム・マイスター』は、先ず人間へと成長し、それから市民になる自己の形成の物語である。分業化した社会の中で個人の成長と社会の調和を目指そうとした。シラーの美的教養は、古代から絶対的に断絶された近代の個人の主観性から自己を形成し、人類の目的へと目指すプロセスとして、歴史哲学として描かれた。その一方で、ファースンのドイツ語訳に影響を受け、政治的参加の要素が抜け、抽象的な国家に入れ代わった。それについてはフンボルトも例外ではなかった。彼の大学の理念でも社会から切り離されて、人格形成をすることであった。

論文審査の結果の要旨

本論文は、ドイツにおける教養 *Bildung* の概念が、18 世紀初頭頃にドイツにおいてどのように成立してきたのか、その成立の歴史的・地理的なコンステレーションを考察するのをテーマにしている。

第一章では、その前提として教養概念と密接に関連した「モダン」意識が西欧でどのように確立したかについて分析し、また同時に教養概念を論じるさいの方法論的な問題についても考察を深めている。また、第一章がモダン意識の概念をめぐる歴史的でいわば垂直的な変化の説明であったのに対して、第二章では、教養概念にかんする地理的でいわば水平的な影響関係の解明となっている。ドイツ独特といわれる教養概念も、じつはイギリス、フランスからの思想的影響なしには成立しえなかった点を明らかにしたのが、同章の成果である。また第三章では、「モダン」という時間意識と教養概念の諸契機がどのように結びついていったかを、ドイツの教養小説と美的教養を題材にして論じている。

17、18 世紀ドイツにおける「教養」概念の形成にかんするこれまでの研究では、同概念がフンボルトとの結びつきであくまでドイツ語圏内で形成されてきたとかがえるのが代表的な見方だった。木村論文はこの見解を疑問視し、本質的な点でその考え方に変更を迫っている。

ことに全体の三分の一を占める第二章は、これまでの研究とは異なって教養概念の成立にたいする比較史的な視点を採用し、ことに 1800 年頃のスコットランド啓蒙、フランス思想からの影響について立ち入った考察を行ったものである。同論文が明らかにしたところによれば、ドイツにおける教養概念はフンボルトよりも前に、すでにモダニティ、人格の内面的形成、進歩思想にかんするトランスナショナルな議論を背景にして発展していた。

木村論文は、内容・方法の両面にわたって啓蒙概念のトランスナショナルな思想史にたいする重要な理論的貢献を果たしているといえる。以上の点で、同論文は博士（人間科学）の学位を授与するにふさわしいと判定した。